

桃子の母親は、桃子が母に対して反抗的なので、これから幼稚園に入園して集団に順応できないのではないかと心配され、電話予約して桃子と来談されました。次は記録から、

《私が桃子に自己紹介してプレイルームへ誘うと、すねた表情で聞いていた桃子はすぐさま私をぶつて、一人玄関に戻り、「帰る!」とわめく。私は「心配なの?」と声かけしてみるが、とりつくしまのない感じ。母はそんな桃子の気持ちを探して宥めたり、論じたりする風もなく、いつもこんな具合いなんですよ、とこちらの出方を窺うように視線を向けられる。私は困惑してしまふ。親面接者が母を先にプレイルームに通すと、その母を追って桃子も入室し、母のペンを奪ってなぐり描きを始める。私に描かせた花の絵が気に入って、桃子もその茎や葉を描きだす。その後、母が別室に移っても気にせず、私と二人でお弁当を作つて森へ行き、楽しく遊んだ。……

終了時間になり、迎えにきた母が突然入室するのを見た桃子は、慌ててハウスにもぐりこみ、私に「狼になれ」という。私が、「狼だぞ」とそれらしいしぐさをして近づくと、桃子はぱっと飛び出して母に抱きつく。なおも狼やつてというので私が応じると、桃子の顔は恐怖で歪み、怒って私を力一杯叩く》

桃子は四歳。色白で愛らしい顔立ちをした、おませな感じの女の子です。来室時に桃子が怒って入室を拒否したのは、相談室に対する（又連れてきた母に対する）不信からであり、私が狼そのものに見えたのだと思われまふ。ここで桃子は母に抱きつきません。ところが、帰りには私（つまり母以外の大人）と楽しく遊んだことを打ち消すように、私を狼にして来室時の状況を再現し、今度はいかと母にしがみついて母の許に帰ってゆきます。桃子の行動は随分と反抗的で乱暴に感じられますが、その奥には不安や脅えがあり、母親への気遣いをかなりする子どもとの印象を持ちました。

翌週、桃子は私の挨拶をうけると黙って自分からブレイルームに入室して飛び出します。「ここ（相談室）は、桃ちゃんが好きなことをして遊んで桃ちゃんらしく元気になるためのお手伝いをする所。子どもの心配を助ける所よ」という、私の説明を静かに聞き来週も来る約束をして帰ります。

その次の回、桃子は色紙でほほえむ鬼を三体作って白板に張り、その周りを幾重にもペンで囲い、鬼の家族と称します。洞穴で仲睦まじく暮らす鬼達と見え、ほほえましく思う反面、鬼で表す桃子の心情を思いました。

当時、桃子は二年保育の年少組に入園し、長いこと母に手をひかれて登園するものの、入室を拒否して廊下でひっくり返って泣き叫び、机の上で寝て過ごす等、先生方の手を相当煩わせていたようです。寛容な先生方で、有難く思いました。

母に対する反抗を幼稚園でも実行していたものと考えられますが、この反抗の仕方は、母の幼ない頃と瓜二つであることが後に明らかになりました。母は集団の枠に

はめられることを極度に嫌う大変美しい方で、その昔学生運動に没頭していたという、今は物静かな旦那様と恋愛結婚されています。反体制、反秩序が、基本的な鬼の特質であるとすれば、^{（注）}両親共に、鬼の要素を十分持つ家庭であるわけです。

私が桃子と会っていて気になったのは、桃子がはでな反抗で自己主張する一方で、私に対して本当に欲しい物や気になる事を直接いえず、ほのめかすような遠回しないい方をして自分を出さない所や、こちらの注意をひこうとして、わざと危ないことをする彼女の護りの弱さ、危うさでした。

桃子の怒りに接すると、つい私の方が不安になって有めようとしてしまうのですが、そんな私自身の傾向に気づいたことから、私自身が彼女の攻撃性を受けとめようとしてみると、次のような遊びが起きました。

《桃子はドロドロの小麦粉粘土を私の腕に「ホーラ、ホーラ」と脅す^{（注）}ように塗りつけて、「とどめー」

と、桃子はさっぱりとした表情をする。そのあと二人して、ぬるま湯で手を洗う。》

このようにして、来談から半年程経った頃から、鬼ごっこを楽しむようになりました。それは、迎えにきた母を基地、私を鬼にして、桃子は母に触れていれば安全というものです。

桃子の中で、私を鬼にしても途方もなく怖く見えることとはなくなり、内的な桃子を受けとめ守ってくれるお母さんに対する信頼感が昂まったことが推察されました。出会いの日の最後にみられた私を狼にする遊びと異なり、私は鬼を演じながら、桃子と母との自然なほほえましいやりとりがみられたことに大きな喜びを感じました。

ブレイルームの中では、ビックリ箱や既成の鬼の面の身体部分をこしらえます。(写真) 私に本当にびっくりするか、怖いか確認しながら、彼女の内なる不安や怖れ

に形を与えて対象化、客観視する作業がくり返されました。

☆ 天邪鬼な桃子の隠れん坊ごっこ



《「こんにちは」玄関で私が挨拶すると、桃子は「うるさい、その顔やめて！」と怒る。私が「あら、嫌だった？」と聞くと、桃子は甘え声を出して「ねえ、何か頂戴」とねだる。》

これは、桃子五歳の頃のある日のやりとりです。こまっしゃくれて生意気、ああいえほこういう桃子の一面がよく表れています。しかし、来談後一年経過し、それとは別の、しみじみと情感のこもった話、率直な物いいがポツポツ出てきていました。

《小麦粉粘土をつくりながら、桃子「四歳の時、テールの下でよくお塩をなめたね。おいしいの。甘いいの。沢山食べた。たまにね。……どんな時って……、今も食べるわ。おいしいわ。」私が「それ反対ことばだ」というと、桃子は一旦否定しておきながら、「好きの反対は？」「おいしいは？」「大好きは？」と次々質問してくる。》

母によると、桃子はことばを覚え始めた頃、おせんべをおべ、せんというようにひっくり返していうため、母に通じないとじれてヒステリーをおこす。長じて好きな童謡も、お手手つながないでと歌うような子だったそうです。私には、母の注意・関心をひくための苦肉の策だったし、精一杯の自己主張だったのではと感しますが、母にしてみれば、ひねくれ者でへそまがり、人の意に逆らう天邪鬼と映ったとして無理からぬことです。

一緒になって塩をなめ、彼女の塩辛い辛い想いを味わい、反対ことば遊びをしていくうちに、彼女の方から、天邪鬼の意味を尋ねます。そうして、辛く寂しい時、人に対して働く天邪鬼な心とそれに反する本当の気持ち、願いに少しづつ触れてゆくことができるようになってゆきます。

この頃から、帰り、廊下の片隅で桃子は私の膝許にうずくまり、迎えにきた母に捜し当ててもらおう隠れん坊が始まりました。母に見い出されるのを信じてじっと受け

身で待つ桃子の姿が私には大変いとおしく感じられ、母に抱き上げられる桃子の満ち足りた表情に、とうとう本当に望んだものを手に入れたね、と喋ってあげたくありませんでした。

ところで、この隠れん坊の鬼は一体誰でしょうか。まずは子どもを見つけにくる母が鬼といえますが、子どもが見つかった瞬間から鬼は私で、母が鬼に奪われた我が子をつれ戻してきた、惑いは母鬼が子鬼を捜してきたといった感じを私は持っています。

以上で、桃子の話はおしまいです。

桃子は二年程相談室に通ってから小学校に入学し、初めは寡黙でしたが、友達もできて元気に登校していききました。桃子の母は、今までに充実感を感じられずに生きてきましたが、ここにきて目の前の子どもと関わる楽しさを味わえるようになりました、と語られました。

ふり返りますと、親に反抗し、へそまがりで天邪鬼だった桃子が、随分素直で率直な物いをするようになり

ました。

しかし、全く素直な子になってしまったかという点、とんでもありません。今も天邪鬼な怖い物好きな面は、むしろ持っています。最近聞いたところによると、桃子は今、吸血鬼の話に凝っているそうです。私としては、話のおもしろさなどは是非聞きたいのですが、聞いたところで「ダメ！これは私の秘密」といわれてしまい、そうないがしています。

(注1) 馬場あき子「鬼の研究」(三一書房)

(注2) 桃子の母が桃子を抱いて、「ホーラ、海に落とすよ。サメが食べるよ」と無意識に脅すのを見たことがあります。

(教育相談室)